

# 六人の矢大臣

浜野洋子

三月×日

ふるさとで私を待っていたのが「彼ら」であったとは。

四月×日

初めての授業。

「先生の勉強のねらいは、豊かで美しい心。よ。わかる？ 詩、好き？」

「わかんね。」

「そう。山や、木や、花見て、きれいだなあって感動するでしょ。」

「わかんね。」

「じゃあ、外、好き？」

「好き、好き、外に行くべえ。」

「外、外。」

と、にわかになんか元気になった。

外に行きたい。花ぐもり。

とろーんとかすんだ空におもちゃの

ような飛行機が一つ浮いている。

外に出たい。

つくしや木の芽の青い匂い。

「外に行こう。あの山桜まで行こう。」

「よし、行こう。」

男四人はどんどん進む。

女の子二人は私の前を、後ろを、な

んとなくうれしそうにして、すみれ

を見せたり。

先頭の一人がこぶしを握ってもどつて来る。

(ちようでは)後ずさりする私の前に、パツと黄色いちようが散る。

「きれい！」

心から笑う彼ら、六人。

「うす紅に、葉はいちはやく萌え」

もう木に登っている彼ら。

鉄筋コンクリートの近代建築。

半円にせり出したガラス越しに矢大臣

山は肩を並べる。

外に行きたい。

外に出たい。

彼らには大きすぎる校舎。

彼らには冷たい黒板だったのだ。

五月×日

べんとうを食べている五人。

きようは原級に行っているはずのK

が、そーっと入って来てロッカーの本

などいじっている。

「みんな、べんと食うの早いべ。」

と、早くも見つけてY。

「うん、早くって。おれも早く食った。」

学校に帰った彼らのつらさ。  
弁当を食うのさえ皆より遅い彼ら。

七月×日

「先生はスカートはいてきらっしい。そのほうがかっこいい。」

私の服装には全員やかましい。

十月×日

「矢大臣年をとったかはげ頭」

この町では有名な作者不明の川柳。だが、彼らにはすばらしい教材となった。

「矢大臣わらびにせんまいたらほの芽」

「一年になんども登る矢大臣」

「矢大臣春もよくて秋もいい」

十一月×日

矢大臣に初雪。暖房の入らぬコンクリートの壁の寒さに、教室の六人はち

ちと固まって静か。

「なにかして遊ぼうか。」

「うわあ。いいの。先生。校長先生

におこらんねえかい。」

「かまね。」

わざと悲壮な顔をして首を振る。

三月×日

「先生、卒業式、きれいにして来て。」

「どんな頭にしようか。」

「まかせっからあ。」

おかしくって一人でいつまでも笑っていた。

三月×日

卒業式。

原級の最後に名を呼ばれ、「はい」

の返事にほっとすると、もう、目が熱くなって来た。

彼らのためにロングドレスに赤いバ

ラの正装。

彼らといえど、一人で生きていかな

ばならない明日。

「とりあえず、返事だけは、すぐ、するんだよ。わかる？」

「わかってるよ先生！」

「矢大臣、忘れるんじゃないよ。」

「わかってるよ先生！」

(田村郡小野町立小野中学校教諭)

## 教育随想

ふれあい

